

# 葉タバコ農家 漢方生薬への転作 国策に



渡辺 賢治

慶応大医学部  
漢方医学センター准教授

## 私の視点

東日本大震災の復興財源として、たばこ増税が浮上した。今回に限らず税収不足のたびに増税の対象にあがる事態となれば、葉タバコ農家の経営に打撃を与えかねない。すでに影響は出始めている。

全国たばこ耕作組合中央会によると、来年以降に耕作をやめる意向を示した農家は全体の約4割に上った。日本たばこ産業(JTI)の廃作の募集に応じたものだ。国内農家は、たばこ事業法の下でJTに全量買い取ってもらって栽培を維持してきたが、こうした構図は崩れつつある。

葉タバコに代えて何を作ればいいのか悩んでいる農家も多いと聞く。そこで提案だが、葉タバコ畑を生薬畑に転換する国策を検討できないか。

漢方薬の原料になる生薬は約80%が中国からの輸入だ。国産もかつて多かったが、安価な中国産に押され、最近で

は自給率は12%程度まで低下している。日本で培ってきた生薬の栽培技術も、生産規模の縮小や農家の高齢化で廃れかけている。日本人にとって親しみのある漢方は、中国頼みという状況が続いている。

ここには落とし穴がある。中国では近年、経済成長とともに医薬向け、健康食品向けに生薬の需要が増加。価格も総じて上昇している。品目によっては将来、輸入自体が困難になる恐れもあり、日本は生薬の自給率を上げる自助努力を迫られている。もし、葉タバコ農家に生薬栽培をしてもらえれば、「農の再生」と

「漢方原料の確保」という二つの課題を同時に解決できる可能性がある。

生薬の流通業者に聞くと、葉タバコ農家であれば作業が似通っているところがあり、生薬栽培は技術的にも難しくないと。畑もそのまま利

用でき、生薬栽培の新たな担い手として期待できる。

農家の採算面はどうか。私も参加した厚生労働省の特別研究によると、たとえば国内の医療用漢方製剤の25%に含まれる当帰は、年間わずか数千万円の転作奨励金で採算が合う。当帰の国内自給率100%は夢ではないのだ。同じく三島柴胡も、年間数億円の補助金があれば、安価な輸入品とも十分に競争できる。

もちろん、こういった産業に補助金を出すかは慎重に議論すべきだが、この種の転作奨励策であれば、国民にも受け入れられやすいのではないだろうか。

国内産の生薬を優先して買い取るなど、製薬会社の支援も欠かせないが、栽培の機械化への補助を進めたり、生産国別に生薬の薬価基準を定めたりするような国の思い切った政策展開にも期待したい。